

維摩詰經と毘摩羅詰經

木 村 宣 彰

一 序

姚秦の鳩摩羅什が訳出した経論は後の中国仏教に至大の影響を与えている。彼の経論の翻訳は般若・法華・維摩などの既訳經典の再訳と中論・百論などの中国に未紹介の論書の新訳とに両分される。成実論や中論などの三論の未紹介論書に関する予備知識は、經典研究が中心の当時の仏教界に於いては望むべくもなく、新來の論書を求める期待は決して大きいものではなかった。当時、般若經・維摩經などの經典は盛に研究されていたが、翻訳に不備があり、仏教研究の上で障害となっていた。そこでかゝる經典の改訳こそが急務であった。

中国仏教の初期において計り知れない足跡を残し、晩年を長安で過した釈道安は、その生涯を通して般若經の研究を精力的に推進していた。出三藏記集卷八所載の摩

訶鉢羅若波羅蜜經抄序⁽¹⁾によれば、道安は襄陽における十五年間、歳に二度の般若經の研究講説を欠かすことなく行なっており、後に符堅によって前秦の都長安に迎えられて以後もそれを継続していたのである。このように晩年の二十年間を専ら般若經の研究にささげた道安ですら訳語・訳文の不備のため經の意味が通じないところがあり、光讀般若經の訳者竺法護や放光般若經の訳者無叉羅に見えて不明の箇所を問ひ質すことの出来ぬことを恨み歎えているのである。そこで經典翻訳の不備を少しでも補うために道安は、同じ般若經類に属する同本異訳の經典の比較研究を考え実行したのである。道安の般若經の比較研究の一端は、道行經序⁽²⁾・合放光光讚略解⁽³⁾・摩訶鉢羅若波羅蜜經抄序⁽⁴⁾などによって知ることが出来るのであるが、そこではつねに既訳經典の翻訳上の過誤を指摘している。仏教学界の指導的地位にあった道安にとって翻

訳の不備・学問上の疑義はそのままに放置することが出来ず、是非とも火急に解決を図らねばならぬ眼前の課題であった。經典翻訳上の不都合は道安にとって自己の努力のみでは云何んとも為し難い問題であり、その根本的な解決策として梵漢両語に通じ、かつ仏教学に精通した学匠即ち龜茲の鳩摩羅什の招聘を国主符堅に提言して将来に備え、今日ただ今の解決策としては自ら兜率天に上生し弥勒の決疑を得ようとしたのである⁽⁵⁾。

このように既訳の經典の翻訳上の誤謬・過失にもとづく仏教学上の混乱は法華經や維摩經等においても同様であった。道安に師事し親しく仏典の研究法を学び、のちに鳩摩羅什の入関の知らせを聞くに及んで訪ねてその訳業に深く参与した僧叡は、法華經後序において鳩摩羅什以前に訳出された竺法護の正法華經等を評し、訳者の原典に対する理解が不十分であり、訳出した經文に大きな誤りが存し、その誤りは俗人の左將軍安城侯姚嵩ですら「深く訳者の失を知れり」と言う状態であったと記している。般若・法華に限らず既訳の維摩・思益・賢劫などの諸經典も亦、同様の情況にあったのである。その中で僧俗に広く受け入れられた維摩經については、すでに東晉の支敏度によって同本異訳の經を一本にまとめ合維摩

經五卷と為し、それぞれの經典の翻訳上の欠を補う努力が為されたのである。支敏度の合維摩經序によれば、維摩經は呉の支恭明（支謙）、西晉の竺法護、竺叔蘭の三人の訳者により先後に伝訳されて三經が行なわれているが、辞句異同・有無離合などが生じ文義に著しい混乱が生じている。そこで支敏度は次のように述べている。

若し其れ一經に偏執すれば、則ち兼通の功を失い、
広く其の三を披けば、則ち文煩にして究め難し⁽⁶⁾。

支謙・竺法護・竺叔蘭の既訳三本の維摩經はともに正確であり、いずれか一本だけに依っていは十分に經の奥深い意味を汲み取ることが出来ない。しかし三本を併せ繙くことは煩しく却って混乱を来し、經の真義を究めることが出来ないとい支敏度は語っている。そこで合本の維摩經を作って欠を補うことに努めたのである。

僧肇の維摩詰經序によれば、後秦の国主姚興は毎に維摩經を尋翫し栖神の宅と為していたが、支・竺の訳出する所のものは「理、文に滯るを恨み、常に玄宗の訳人に墜んことを懼る」と述べ、旧来の訳經の不備を指摘したと伝えている。

僧叡も亦、毘摩羅詰提經義疏序に、究摩羅法師の翻訳を蒙ってはじめて前訳の謬文が經の本趣を傷け、乖くも⁽¹⁰⁾

のであったことが知らされた、と述べている。

僧肇や僧叡に限らず、当時の仏教界の心ある人々は皆、既訳経典の不備を切実に感じ、そのままでは仏教学の発展は望むべくもないことを嗟嘆し、經典の正確な再訳と、その講説指導を為し得る人材を熱望していたのである。まさにその時に仏教学にも造詣が深く、旧來の經典に不満を持っていた国主姚興によって国師の礼を以て迎えられた鳩摩羅什こそは、仏教界の絶大な期待に応え得る人材であった。そこで鳩摩羅什の訳經の実態を維摩經の訳出を事例として若干の考察を加えたいと思うのである。

二 毘摩羅詰經とは何か

鳩摩羅什訳の維摩詰所説經（以下、維摩詰經）三卷は、古來より名訳の譽が高く道俗に広く受け容れられて中国の思想・文学・芸術などに多くの影響を与えた。⁽¹⁾鳩摩羅什による維摩詰經の訳出経緯に関しては僧肇の維摩詰注經序に詳しい。大秦天王姚興が大将軍常山公姚顒、左將軍安城侯姚嵩に訳場の管理を命じ、弘始八年（四〇六）常安の大寺に義學の沙門千二百人を集めて鳩摩羅什を訳主として翻訳されたのが維摩詰經三卷である。僧肇の序に記録するところによって維摩詰經三卷の訳出年時等に關

して定説が確立しているのである。それ以降、梁の僧祐も出三藏記集卷二の新集經論錄の鳩摩羅什の条に、

新維摩詰經三卷

弘始八年於長安大寺出

と記している。さらに、隋の費長房の歷代三寶紀、唐の道宣の大唐内典錄、智昇の開元釈教錄など諸經錄もひとしく「弘始八年、於大寺出」と註記しており、この經の訳出に關しては何ら疑問を挟む余地が無い。鳩摩羅什の訳出經論の中でも翻訳經緯の明らかな数少ない經典の一である。僧祐は新集經論錄に鳩摩羅什訳として三十五部の經論を記載しているが、その中で維摩經の外に、小品經・小品經・法華經・自在王經・百論・禪法要の六部にのみ訳出年次を注記しているのである。即ち、鳩摩羅什訳の維摩詰經は、国主姚興の保護の下、弘始八年に長安大寺に於いて訳出されたとするのが定説となっている。しかし、いま改めて鳩摩羅什訳の維摩經について検討すると種々なる疑問が生じてくるのである。

(一) 先ず、鳩摩羅什の門下にあつて深く訳經に参与した英俊僧叡の撰になる毘摩羅詰經義疏序の存在である。僧叡ははじめ釈道安に師事し、のちに鳩摩羅什が長安に至るや訪ねて禪法要の訳出を請い、鳩摩羅什から彼の入関後、最初の漢訳經典である禪經を与えられ、それに従つ

て日夜修習につとめた。爾來、鳩摩羅什の訳場に列して
参正を勤めた。周知の如く法華經の翻訳にあたっては自
らの訳文を進言し、「実に然り」と鳩摩羅什から歎ぜら
れたという。また、成実論の訳出の際にも、直ちに成実
論を講じ、鳩摩羅什をして「吾、經論を伝訳し、子（僧
叡）と相値うことを得て真に恨む所なし」と称歎せしめ
たという。

鳩摩羅什が出した經論に対してもっとも多くの序を撰
し、その中で現に十一部が出三藏記集に収載されている。⁽¹⁹⁾
その序の中で、僧叡は鳩摩羅什の維摩經の翻訳に出遇っ
た感激を、

玄指を先匠（釈道安）に稟くるも亦復、未だ其の絶
往の通塞を知らざるなり。既にして究摩羅法師、玄
文を正し、幽指を摘くを蒙りて、始めて前訳の本を
傷つけ謬文の趣に乖くを悟るのみ。⁽²⁰⁾

と述べている。その彼が鳩摩羅什の講筵に列して「講次
に於いて疏して以て記と為し」たものが毘摩羅詰經義疏
である。しかも、僧叡は師の鳩摩羅什が訳出した經典の
題目を、

此の經「毘摩羅詰所説」を以て名となすは、其の人
を尊び、其の法を重んずればなり。⁽²¹⁾

と釈し、鳩摩羅什新訳の經名が「毘摩羅詰所説經」であ
ることをはっきりと言明しているのである。このことは
云何に考えるべきであろうか。現行の鳩摩羅什訳の經題
は 'Vimalakirti' を維摩詰と音写し、維摩詰所説經と呼
ばれていることは周知の通りであり、それは僧肇が序に
云うところにも一致する。単に音写の相違と云えばそれ
までであるが、ともに維摩經の訳者鳩摩羅什の高弟であ
る僧肇と僧叡とが、同じく鳩摩羅什の講説の聴次に預つ
て著した注疏が、一は「維摩詰經注」であり、他の一は
「毘摩羅詰經義疏」と称し、両者の云うところの經名が
異なるのは奇妙と云えば甚だ奇妙なことである。

(二)宋明帝の勅命を受けた中書侍郎陸澄が編纂した法論
十六帙一百三卷は、当時の仏教界に於ける種々な学問的
論義・論文等を集めたもので極めて貴重な資料であった
が、今日は散佚して伝わらない。ただし法論の目録のみ
は現存する。その法論目録の第三帙般若集に、

維摩詰經注序 釈僧肇

毘摩羅詰經義疏序 釈僧叡⁽²³⁾

と、維摩經に関する両序を並記している。この目録によ
って僧叡の序は当初から右の如く呼ばれており、後に改
称されたり、伝承の途中で誤伝されたものでないことは

明らかである。尊敬する師の鳩摩羅什が、僧叡自身にとっても待望久しい經を新らたに訳出したのであれば、その經名を誤記することなどまったく考えられないのである。その点から僧叡の序における毘摩羅詰經という名称は十二分に注意を拭うべきである。さらに僧叡は他の經論の序においておおむね翻訳の年時を記録しているのに対して毘摩羅詰經義疏序では經の訳出年次に関して全く言及していないのである。一方、維摩詰經注序を著わした僧肇は「弘始八年歲次鶉火」と經の訳出年を記している。この歳に鳩摩羅什は妙法蓮華經も翻訳しているのである。僧叡は法華經後序の文に「是歲弘始八年歲次鶉火」⁽²⁴⁾と明記しているのに、同年に訳された維摩經については何ら述べてはいないのである。このことは毘摩羅詰經と稱する經の訳出が維摩詰經が訳出された弘始八年とは別時であることを示唆するものではなからうか。

(三)廬山の慧遠と長安の羅什とは南北仏教界の重鎮として指導的立場にありながら互いに密接な交渉を有していた。その両者の間で大乘仏教の要義をめぐって交わされた往復文書はのちに集録され大乘大義章と称して現存している。これは学徳一世を風靡した高僧慧遠が質問者の立場に立ち、般若・維摩・法華などの諸經を翻訳して長

安仏教界において名声を恣にしていた鳩摩羅什に仏教学上の疑問に対する解答を求めたものである。ともに著名な両者が偶々質問者と解答者の立場に在ったとしてもそこには互いに執るべき態度がある。殊に質問者の立場にあった慧遠は新らたに鳩摩羅什が訳出した經典に対して特別の関心を有しており、旧訳の諸經とは明確に区別を為していたと考えられる。

大乘大義章は法身に関する論義が主題となっているが、その卷上第二章において真法身たる法性生身は妙行によって成ずるという鳩摩羅什の見解に対して慧遠は「毘摩羅詰經」の經文を引きながら改めてその理由を尋ねているのである。⁽²⁶⁾この毘摩羅詰經の引用を云何に考えるべきであろうか。慧遠が大乘大義章の中に毘摩羅詰經として引く經文は現存の支謙訳にも鳩摩羅什訳にも一致する經文を見い出すことが出来ない。所引の經文は或いは記憶による取意かもしれないが、經名までもが相違するということは、解答者がその經の訳者であれば尚更に質問者たる慧遠の態度は奇妙であり配慮を欠くものである。鳩摩羅什に質問するのには鳩摩羅什訳を依用しないのは甚だ奇異である。⁽²⁷⁾般若・維摩など従来の学界で重視されていた旧訳諸經の欠を補い、明快・暢達な訳文で再訳した鳩

摩羅什訳の諸經典に対する当時の仏教界の反応は迅速で、新訳の經論はすぐに廬山にもとけられたのである。般若經の釈論たる大智度論百卷を初学者の便を考えて二十卷の論抄を作り、法華經の訳が為るとすぐに法華經序を撰した慧遠であれば、鳩摩羅什の翻訳があるのに敢えて別訳の經典をもつて鳩摩羅什に諮問するとは考えられないのである。鳩摩羅什へ慧遠が最初に質問の書状を送ったのは弘始九年のことであり、既に維摩詰經も翻訳されていたことを併せ考えると、慧遠の引用する毘摩羅詰經とは一体何か、十分な検討が必要である。

(四)鳩摩羅什の訳になる大智度論百卷の中には法華・維摩・首楞嚴・思益など鳩摩羅什自らが訳出した經典が引用されている。殊に法華經に次いで多く引用されている經典は維摩經であり、都合十一回に及んでいる。⁽³⁰⁾そこに引用されている箇所は、仏国品三回、弟子品三回、不思議品一回、仏道品一回、入不二法門品二回、菩薩行品一回とほぼ維摩經の全体に及んでいる。そこで維摩經を引用する場合、その經名は一つの例外もなくいずれもが「毘摩羅詰經」と訳されており、決して「維摩詰經」とは称していないのである。僧肇らの伝えるところによれば維摩詰經の訳出は弘始八年で、智度論の翻訳が完了し

たのは、その前年の弘始七年であった。⁽³¹⁾その間に一年の開きがあると雖も、經も論もいずれも鳩摩羅什の翻訳であることを勘案すれば、そこに何らかの事情が介在していると考えられる。

要するに前年の諸の疑点は、鳩摩羅什の維摩經の訳出に直接関わりを有するものである。従来の説では鳩摩羅什訳の維摩經はただ弘始八年に長安大寺で出された維摩詰經一卷のみであると為しているが、此で改めて現存の維摩詰經とは異なる鳩摩羅什訳毘摩羅詰經の存在について検討を加えようとするのが小論の目的である。

三 注維摩經所引の別本

先に指摘した数々の疑点は一見不可解なものであるが、もしも鳩摩羅什に現存の維摩詰經の外に毘摩羅詰經なる經の翻訳があったとすれば、いずれの疑義も瞬時に氷解するものである。鳩摩羅什訳の經論の中で弘始八年訳出が定説である妙法蓮華經にしても実はその前年の弘始七年に既に一度翻訳されていたと考えられるし、弘始六年訳が定説の百論も亦、実は再訳であって既に鳩摩羅什の入関間もない弘始四年に初訳されていたのである。⁽³²⁾これら鳩摩羅什の訳經の実態に関しては、別稿で論究する予

定であるから此では言及をひかえるが、維摩経について
も弘始八年のただ一度の訳ではなくて現行の維摩詰経以
前にすでに毘摩羅詰経と称する経が存した可能性が甚だ
大きい。しからば弘始八年以前の謂ば初訳本ともいうべ
き維摩経においては、実際にいかなる翻訳が為されてお
り、現行本といかに相違していたのであろうか。毘摩羅
詰経が鳩摩羅什による維摩経の初訳であるとすれば、後
に弘始八年に訳出された現行本よりもはるかに支謙訳な
どの旧経の影響がより顕著で訳語の上でも近似するもの
であったと推測される。右の推定を考証するためには是
非とも毘摩羅詰経の経文を提示せねばならぬであらう。

中国における大乘經典の翻訳はすでに後漢代から為さ
れており、その数量も決して少なくはなかったが、訳文
が未熟で十分に文意が通じない点があった。五世紀初頭
に長安に迎えられた鳩摩羅什に与えられた最大の課題は、
既訳の諸經典における訳文の過誤を正して経意が完全に
通じるように改訳することにあった。従って鳩摩羅什の
訳経はただ単に将来の胡本を翻訳するのではなく、むしろ
以前の旧経の過失を改正して適切な解釈を与えながら
權威ある経文を決定するものであった。鳩摩羅什の訳
場には国主姚興躬ら旧経を以て臨み、つねに旧経との比

較検討を為しながら訳文が定められたのである。かくし
て鳩摩羅什によって出された決定訳には経題に「新」字
を冠してその權威を示したのである。⁽³³⁾ 維摩経の訳出に際
しても当然のことながら以前の旧経を参照しているの
である。

鳩摩羅什訳維摩詰経に対する最古の注釈である注維摩
経に「別本云」と称する引文がしばしば認められる。そ
れは三字乃至十二字の経文であり、全体で二十七箇所
に及んでいる。初品の仏国品の注釈中に比較的多く見ら
れるが、ほぼ各品にわたって散見する。注維摩経における
「別本」引用のパターンは次の四類型である。

- (1) 経文―「肇曰」・「別本云」・「什曰」(十五回)
- (2) 経文―「別本云」・「什曰」(八回)
- (3) 経文―「肇曰」・「生曰」・「別本云」・「什曰」(三回)
- (4) 経文―「生曰」・「別本云」・「什曰」(一回)

先学は別本云の引用が肇注の直後にあることに特別の
意義を見だして論究されているが、この類型によって
見るとき「生曰」の竺道生の注に続く場合もあり、むしろ
「別本云」の引用文は必ず「什曰」の鳩摩羅什の注の
前に付くものである。この別本に対する徹底的な究明は
注維摩経の成立を考える上でもきわめて重要な課題であ

るが、未だ学会において確定的な見解を得るには到っていないようである。近年の成果を筆者の管見の及ぶ範囲で発表年に従って整理すれば次の三種類にまとめることができるであろう。

(一)まず、第一の説は、別本をもって梵語原典となすものである。第一説の論者は注維摩の中でサンスクリット原典に言及する場合に「梵本」として指摘するものと、「別本」として指示する場合とがあり、別本とはサンスクリット原典のことであるという。³⁴⁾

(二)第二の説は、名のある門弟の筆録した羅什の維摩經疏を別本となすものである。すなわち、第二説の論者は「羅什の注解は門弟達によって筆録されたものであるから数種類あったことになる。僧叡の義疏がそれであり、別本といわれるものや道融の筆録になったものも羅什の注解である」³⁵⁾との見解が発表されている。

(三)第三の説は、鳩摩羅什以前のいわゆる古訳の維摩經を別本となすものである。この説には古訳の中で特に竺法護訳の維摩經に特定するものと、単に鳩摩羅什以前の古訳の維摩經と為すものとがある。³⁶⁾

この三説のうち「別本云」の内容を第一説および第三説は、それ以下の経文のみに限定しているのに対して、

第二説では経文とそれに続く鳩摩羅什の注をも含めて考えているところに特色がある。これらの見解に一々論評を加える紙数は与えられてはいないが、右の諸説のいずれもが、鳩摩羅什の翻訳は、ただ一回限りのもので、ただ一本のみが存すものとの予断に立っているのに対し、筆者はこの場合の別本とは鳩摩羅什の維摩經翻訳に於ける「別時の訳出本」の謂であり、従って別本の文は経文のみを指すものと考えているのである。要するに、「別時訳出本」即ち「別本」とは、呉の支謙訳らの異訳維摩經を指すものではなく、鳩摩羅什が維摩詰經を翻訳した弘始八年とは別時に訳出した維摩經を指すものである。

すでに学者によって指摘されているように鳩摩羅什訳の維摩詰經は、その文・理の許す限りにおいて支謙訳維摩詰經に則っているのである。³⁷⁾ところが現存の支謙訳は梁代の経録には既に欠本と断定されている等、³⁸⁾訳経史上から十二分の検討を要するものであるが、このことは暫く置き、一往支謙訳と為して論を進めることとする。そこで鳩摩羅什訳に絶大な影響を与えている支謙訳維摩經と別本の経文と現行本の鳩摩羅什訳維摩詰經の三者を比較研究するとき極めて興味ある結論に達するのである。

四 別本と鳩摩羅什訳維摩詰經

注維摩經の「別本云」の下にある注において訳者鳩摩羅什は、現行本の經文と別本との差違を念頭におきつつ注釈している例を示すことによって「別本」が鳩摩羅什自身の別時の訳出本であることを明らかにしたい。注維摩經卷一仏國品の經文「衆所知識」の釈に曰く。

別本云、衆所敬仰。什曰、梵本云、多知多識。顯德

應⁹⁹時故物咸知識、物咸知識故敬¹⁰⁰之者衆、此義則出也。仏國品の菩薩の徳を顯わす箇所は現行本では「衆所知識」と訳されているが、別本では「衆所敬仰」とある。

これに対する鳩摩羅什の見解は、梵本を直訳すれば「多知多識」となるが、顯徳はそれぞれ時に應じて為されねばならないから多くの対告衆を挙げる時においては、物即ち衆生が咸く菩薩のことを知っていることを言えば顯徳となり、皆に知られているということは敬う者が衆いということであり「衆所知識」と訳しても別時に訳した「衆所敬仰」の義は表出されていると云うのである。

また、同書卷六不思議品の「諸仏菩薩有解脱名不可思議」の下に別本の經文を挙げて、

別本云、神足・三昧・解脱。什曰、同体異名也。夫

欲¹⁰¹為而不¹⁰²能則為¹⁰³縛也。應¹⁰⁴念即成¹⁰⁵解脱、無¹⁰⁶不¹⁰⁷能名¹⁰⁸為¹⁰⁹解脱、能然而莫¹¹⁰知¹¹¹所¹¹²以然¹¹³、故曰不思議也。

と注釈している。現行本では単に「解脱」と訳すところを、別本では「神足・三昧・解脱」と為している。そこで鳩摩羅什の注は、まず別本にある神足・三昧・解脱の三は同体の異名であると解釈し、次に解脱について、解脱を為んと欲して而もそれを得ることが出来なければ三界に束縛されるが、解脱を為さんと欲して現にそれを成就し得ることが解脱である。莊子達生篇に説くところの「命」と同じように然る所以を知らずしてしかも然るものが解脱であり、それ故に解脱のことを「不可思議」というのである。この鳩摩羅什の注釈は別本の「神足・三昧・解脱」の經文と現行本の「有解脱、名不可思議」の經文とを併せ論じ会通をはかったものである。

別本がもし鳩摩羅什以前の支謙らの旧經であるとすれば、鳩摩羅什は別人の訳について訳出の経緯や所以を釈していることになる。そのようなことが絶対に無いとは言えないが、甚だ不自然なことである。この点からも別本が「別人の訳出本」などを指すものではなく、鳩摩羅什自らの「別時の訳出本」であることが頷けるであろう。

更に次のような例を指摘することが出来る。注維摩經

卷一に仏国品の「念・定・総持・弁才不斷」を注釈し、別本云、其念不遠離乃至弁才成就。什曰、念者無上道念也。不斷不_二中斷_一也。不斷義通_二貫下三法_一也。

菩薩得_二此四法_一、深入堅固、逕_レ身不_レ失歷_レ劫愈明、故言_二不斷_一也。⁽⁴¹⁾

と述べている。別本の「其念不遠離乃至弁才不成就」の下「什曰」の注は、先の二例とは異り、別本の文には言及しないで現行本の「念・定・総持・弁才不斷」に従って釈を為している。このことは「別本云」が、「什曰」以下の注釈を含むものではなく、別本とはただ經文のみに限るもので、鳩摩羅什の維摩經疏を指すものでないことの証左である。

鳩摩羅什の訳經は常に翻訳とその講釈とを併せ行うものであった。恐らく弘始八年の維摩詰經訳出の際にも、訳場に於ける講筵に列した門弟が、既に流布していた鳩摩羅什の別時訳出の維摩經を持参してそれを「別本」と称して新たに訳出した經文との異同を諮したのである。これに対して訳主の鳩摩羅什は、別本の經文と比較し、時には胡本（梵本）を引きながら詳しく説明を加えたのである。それが注維摩經における「別本云」とそれに続く「什曰」として記録されたのである。従って現行本の

維摩詰經が弘始八年に為された治定本であるのに対して別本は鳩摩羅什の初訳本あるいは草稿本と考えて間違いない。それ故、現行本に比べて別本の經文の方に鳩摩羅

表 I

(八)	(七)	(六)	(五)	(四)	(三)	(二)	(一)	
得世際感聖賢 ⁽⁶³⁾	聖衆 ⁽⁶⁰⁾ 見人而悦、奉事	懈廢之人 ⁽⁵⁷⁾	知非我不断忍 ⁽⁵⁴⁾	仏国清淨之行 ⁽⁵¹⁾	其念及定總持諸 宝悉成其所 ⁽⁴⁸⁾	其念及定總持諸 宝悉成其所 ⁽⁴⁸⁾	菩薩三万二千皆 神通菩薩 ⁽⁴²⁾	旧經（支謙訳維 摩詰經）
梵天 ⁽⁶⁴⁾ （修）四無量令生	心不厭倦 ⁽⁶¹⁾	衆少之人 ⁽⁵⁸⁾	以無我法起忍 ⁽⁵⁵⁾	仏国清淨之行 ⁽⁵²⁾	其念不遠斷乃至 弁才成就 ⁽⁴⁹⁾	其念不遠斷乃至 弁才成就 ⁽⁴⁹⁾	菩薩三万二千得 大神通 ⁽⁴³⁾	別本（注維摩經 所引）
道 ⁽⁶⁵⁾ 修四無量開梵天	倦 ⁽⁶²⁾ 教化衆生終不厭	衆小法者 ⁽⁵⁹⁾	以無我法起瞋提 波羅蜜 ⁽⁵⁶⁾	淨土之行 ⁽⁵³⁾	斷 ⁽⁵⁰⁾ 念定總持弁才不	斷 ⁽⁵⁰⁾ 念定總持弁才不	菩薩三万二千 ⁽⁴⁴⁾	鳩摩羅什訳維摩 詰經

什が参考した異訳旧経の影響がより顕著であり、後の改訳によって旧経の影響がより薄くなるのは事柄の趨勢から云っても当然である。そこで旧経として呉の支謙訳維摩詰經、注維摩經所引の別本、現行本の鳩摩羅什訳維摩詰經の三本を対照して示せばより明瞭にそのことが確かめられるであろう。

表Ⅰの(二)および(四)は別本と旧経の經文とは一致する。これは鳩摩羅什が訳經の際、殊にその初訳においては、既に漢訳されていた旧経の文を理の許す限り則ったことの証左である。また、(一)の別本における「得大神通」や(三)の別本における「成就」などは、旧経の「神通菩薩」や「悉成其所」の經文に導かれた訳語である。

次に挙げる別本の諸例は、前記のものとは異なる視点から別本が鳩摩羅什の初訳本で、その經文は既訳の旧経の存在を抜きにしては考えられぬものであり、更に現行の治定本において改訳を加えたことを示すものである。翻訳者としての鳩摩羅什の特色の一は、自己の見解によって經論の一部を取捨選択して翻訳するところにある。僧肇が「此の土に無益となすが故に闕いて伝えず」と記しているように鳩摩羅什は翻訳に際して大胆に原典の一部を刪略している場合がある。次の諸例は鳩摩羅什が翻

訳の際に参照した「旧経」と自らの初訳たる「別本」と改訳治定本との関係を示す興味ある資料となるであろう。

表Ⅱ

	(一)	(二)	
旧経(支謙訳)	菩薩以無求於國故、於仏國得道、以不言我教照人民生于仏土。菩薩以善性於國故、於仏國得道、能成衆善為人重任生于仏土。菩薩弘其道意故、於仏國得道、恒以大乘正立人民得有仏土。 ⁶⁷⁾	(一)	鳩摩羅什訳 維摩詰經
別本	直心深心菩提心。 ⁶⁸⁾	法同如法性實際。 ⁷¹⁾	直心是菩薩淨土、菩薩成仏時、不諂衆生来生其國。深心是菩薩淨土、菩薩成仏時、具足功德衆生来生其國。大乘心是菩薩淨土、菩薩成仏時、大乘衆生来生其國。 ⁶⁹⁾
	不見仏不聞法、是亦有師。不蘭迦葉、摩訶離瞿	不見仏乃至隨六師所墮。 ⁷⁴⁾	不見仏不聞仏、彼外道六師富蘭那迦葉、末伽梨

(三)	(四)	(五)
耶、婁阿夷崙基耶、今離波、休迦旃先、比盧特尼健子等、又賢者彼師說犍為道、從是師者為住諸見 ⁽⁷³⁾	決從如起耶、從如滅耶。 ⁽⁷⁶⁾	又問、六十二見當於何求。答曰、當於如來解脫中求。又問、如來解脫者當於何求。答曰、當於衆人意行中求。 ⁽⁷⁹⁾
	從如起滅。 ⁽⁷⁷⁾	六十二見諸仏解脫衆生意行。 ⁽⁸⁰⁾
拘睺梨子、刪闍夜毘羅胝子、阿耆多翅舍欽婆羅、迦羅鳩駄迦旃延、尼健陀若提子等、是汝之師因其出家、彼師所墮汝亦隨墮。 ⁽⁷⁵⁾	為從如生得受記耶、為從如滅得受記耶。 ⁽⁷⁸⁾	又問、六十二見當於何求。答曰、當於諸仏解脫中求。又問、諸仏解脫當於何求。答曰、當於一切衆生心行中求。 ⁽⁸¹⁾

ここに示した例は、旧経の訳文を念頭において、それを刪略して訳出し、後に改訳したと考えられるものである。恐らくこの別本の場合はその旧経の経文があつてこそ始めて為し得る省略の仕方であり、直接に胡本から翻訳したものとは考えられない。表Ⅱの(三)の別本にお

て六師の名を略しているのは、鳩摩羅什の翻訳における常套的手段である「此の土に無益となすが故に闕いて伝えず」⁽⁸²⁾の例であろう。だが、それでは十分に文理を尽すことが出来ず、改訳に際しては六師の名の一々を列したのであるが、その場合、西域の訛音を可能な限り、天竺の正音をもって正したものである。僧叡が小品経序に「胡音を失せる者は、之を正すに天竺を以てす」⁽⁸³⁾と鳩摩羅什の翻訳法について伝えているが、これはその好例である。表Ⅱの(一)および(二)等の旧経は意味がとりにくく、僧叡の言葉をかりるならば「訳者その虚津に味く靈関之を啓くことなき」⁽⁸⁴⁾ものであり、この経文では「徒らに復た搜研し皓首なるも、並びに未だその門を窺う者あらず」⁽⁸⁵⁾ということになる。殊に(二)の旧経の文は、その傾向が顕著である。そこで鳩摩羅什は別本で「法、如・法性・實際に同ず」と訳しているのはまさに彼の独自の訳語であるが、このままでは文理において不十分で、後に現行本の如くに改訳したのである。この別本の下に、鳩摩羅什は「此の三、同じく一実なり。観ずる時に深淺あり。故に三名あり。始め其の実を見、之を如と謂う。転た深まり、之を(法)性と謂う。其の辺を尽す、之を實際と謂う」⁽⁸⁶⁾と注釈している。この注は明らかに彼の翻訳になる

大智度論の所論に従ったものである。智度論卷三十二に、問答を設けて次のように説いている。

問曰、如法性實際。是三事為_レ一_レ為_レ異、若_一云何説_レ

三、若三今_レ応_二当分別説_一。

答曰、是三皆是諸法実相異名₍₈₇₎。

この智度論の所説によつて旧經の訳文を大幅に改めて別本の如く爲したのである。

また大乘大義章卷中を見るに、慧遠が「如・法性・實際を問う」₍₈₈₎たのに対して鳩摩羅什は如と法性と實際との三は同じく諸法実相であるが、未得無生忍の時の所觀を「如」、得無生忍以後の所見を「法性」、成仏の時の所觀を「實際」というのであると三位に随つて名付けられたものであると説明している。更に鳩摩羅什の門下にあつて解空第一と称された僧肇も、鳩摩羅什の釈と同じく「觀を用いるに深淺あるが故に別に三名を立つ」₍₈₉₎と爲し、諸法実相の異名たる如・法性・實際の關係を、まず遠くに樹を見て明らかに是れが樹であることを知るの「如」に相当し、次に樹を近くに見て是れが何の木かを知るのが「法性」に当り、更に樹の根茎枝葉を尽く知るのが「實際」であると説いている。これは僧肇が鳩摩羅什の講筵に列し親しく聴いたものであらう。よつて、鳩摩羅

什の法・法性・實際に關する見解は、般若經や智度論等の所説を整理して既に自らの思想にまで昇華されていたものと見る事が出来る。

表Ⅱの(二)別本では、如・法性・實際と訳していることに注目すべきである。古訳の放光般若經等では「實際」と訳しているところを、鳩摩羅什の小品般若經では「實際」₍₉₀₎と訳しており、「實際」は彼の独自の訳語である。

従つて表Ⅱ(二)の別本は明確に鳩摩羅什の翻譯であり、以前の竺法護らの訳文とは考えられないのである。

以上の考察によつて注維摩經所引の「別本」とは、鳩摩羅什が現行の維摩詰經とは別に訳出した維摩經の草稿訳であることが明らかとなる。治定本たる維摩詰經の訳出以前に出された未潤色の經が「別本」であり、それは「毘摩羅詰經」と呼ばれて流布していたのである。

五 結

姚秦の鳩摩羅什によつて訳出された多数の經論の中でも維摩詰經は殊の外に広く道俗に受け容れられた。僧肇や僧叡らも鳩摩羅什に師事する以前から古訳の維摩經に接していたし、姚秦の国主姚興も毎に茲の維摩經を尋覓し栖神の宅と爲していたという。それ故、正確で權威あ

る維摩經の翻訳こそは実に待望久しいものであった。姚秦の弘始八年に国主の外護を得て、国立の訳場である長安大寺に僧肇ら千二百人の義学沙門を集めて訳出された維摩詰經については、その訳出の経緯を語る記録も確かであり、訳出年次などについて定説が確立している。ところが、前来の考察から鳩摩羅什には弘始八年以前に、すでに毘摩羅詰經と称する維摩經が訳出されていた。その毘摩羅詰經は、訳場に国主を迎えて為されるような公的な訳業ではなく、訳文も支謙訳など旧經の影響を大きく受けたものであったと考えられる。僧叡はそれに注釈を加え毘摩羅詰經義疏を著したのである。その後、弘始八年に至って国主の命を受けた姚顗、姚嵩の管理の下で鳩摩羅什は維摩經の決定訳たる維摩詰經を訳出し、その際に別本たる毘摩羅詰經との異同にも留意して講義したのである。

最後に、筆者の見解を傍証するものとして隋の吉蔵の説を引いて筆を擱くことにする。吉蔵は法華經に対して多くの注釈を為しているが、維摩經についても浄名玄論八卷、維摩經義疏六卷などを遺している。博覧をもつて知られる吉蔵はその維摩經略疏に、明らかに鳩摩羅什訳の維摩經に二本ありと述べ、実際に經文の相違を示して

いるのである。

その中から一例を示せば、維摩經見阿闍伽国品の「我觀如来、前際不来、後際不去」⁽⁹¹⁾を釈して「三世の觀に就いて、大品に明す。過去を前際と為し、未來を後際と為し、現在を今際と為す、と。若し爾らば、いま云何が前際来らず、後際去らず、と言うや。解して云く、經に二本あり。一には大品に同じ、此の本は大品に異る。云々」⁽⁹²⁾と説いているのである。この吉蔵の説によれば、現行の維摩詰經とは異なる別本が存在し、經文も相違していたことになる。更に吉蔵は同書卷二には弟子品阿難章の經文についても同様に「經に二本あり」⁽⁹³⁾と明言しているのである。三論宗の祖である吉蔵は三論の訳者たる鳩摩羅什には畏敬の念を有しており、その彼が鳩摩羅什の訳出經典に二本ありとの発言は必ずや余程の根拠があつてのことである。

従来から鳩摩羅什の維摩經訳出について論じたものは決して少なくはない。その多くは西蔵訳の維摩經に根拠をおき、鳩摩羅什の翻訳を批判的に論ずるものが多い。時には西蔵訳をもって唯一の權威となし、鳩摩羅什訳にもとづく古来の理解は誤りで僧肇以下、經を読み誤ったとの論評までが存する。それらの評は鳩摩羅什の訳經の

經緯およびその背景が未だ十分に明らかになっていないが、為とも考えられる。そこで小稿は特に維摩經を手掛りとして鳩摩羅什の訳經の実態解明を試みたものである。

(昭和六十年八月二十五日稿)

注記

- (1) 出三藏記集卷八 (大正55・五二b)。
- (2) 出三藏記集卷七 (大正55・四七a~c)。
- (3) 出三藏記集卷七 (大正55・四七c~四八b)。
- (4) 出三藏記集卷八 (大正55・五二b c)。
- (5) 拙稿「釈道安の弥勒信仰」『大谷字報』第六十三卷第四号) 参照。
- (6) 出三藏記集卷八 (大正55・五七b c)。
- (7) 僧祐は出三藏記集卷二の新出經論錄(大正55・一〇a)には「合維摩詰經五卷 合支謙竺法護竺竺蘭」^合と記し、支謙訳維摩詰經二卷、竺法護訳維摩詰經二卷、竺叔蘭訳維摩詰經二卷の三經を合して一本と為したように記している。しかし、出三藏記集卷八 (大正55・五八b c) 所収の支敏度の合維摩詰經序には「余、是を以て兩を合し、相附せしめ、(支恭) 明の所出を以て本と為し、(竺叔) 蘭の所出を以て子と為し、章を分ち句を斷じ、……上を瞻、下を視、彼を読み此を案じ、以て乖迂を釈くに足る」と述べ、支恭明即ち支謙の訳出本と竺叔蘭の訳出本とを上下二段に対照したことを明かしている。恐らくは、僧祐の云うように三本を合したのではなく、序に云うように同本異訳の三經が存するが、その中の二本を合本にしたものであろう。

- (8) 出三藏記集卷八・合維摩詰經序 (大正55・五八b c)。
- (9) 出三藏記集卷八 (大正55・五八a b) 所収。この僧肇の序を梁僧祐は出三藏記集卷八に「維摩經序」と名付けて掲載しているが、同書卷十二 (大正55・八二b) の宋明帝勅中書侍郎陸澄撰法論目錄によれば「維摩詰經注序」とある。従って、僧肇の序は正しくは「維摩詰經注序」である。
- (10) 出三藏記集卷八 (大正55・五八c~五九a)。
- (11) 鳩摩羅什訳維摩詰所說經は大正新脩大藏經第十四卷經集部一所収。なお、維摩經の中国に於ける受容については横超慧日「維摩經の中国的受容」『仏教研究論集』所収) 参照。
- (12) 出三藏記集卷二 (大正55・一〇c)。
- (13) 歷代三寶記卷八 (大正49・七七c)。
- (14) 大唐内典錄卷三 (大正55・二五二c)。
- (15) 開元釈教錄卷四 (大正55・五一二b)。なお、唐明佺の大周刊定衆經目錄卷六 (大正55・三八六b) 等も「後秦弘始八年」と記録している。ただし、隋法經等の衆經目錄卷一 (大正55・一一九a) や彥棕の衆經目錄卷二 (大正55・一五六c) は単に「後秦弘始年」とのみ記している。
- (16) 出三藏記集卷二 (大正55・一〇c)。
- (17) 出三藏記集卷八 (大正55・五八c~五九a)。僧祐の出三藏記集卷八には「毘摩羅詰提經義疏序」と為すも宋の陸澄の法論目錄には「毘摩羅詰經義疏序」と為す。
- (18) 高僧伝卷六 (大正50、三六四a b)。僧叙については横超慧日「僧叙と慧叙は同人なり」『中国仏教の研究』第二所収)。古田和弘「僧叙の研究」(『仏教学セミナー』第10

号・第11号所収) 参照。

(19) 僧叡の序で現存するものは次の十一部である。小品経序、法華経後序、思益経序、毘摩羅詰提経義疏序、自在王経後序、閼中出禅経序、大智度論序、中論序、百論序、十二門論序が現存し、いずれも出三蔵記集に収める。右の外に梵網経序などが存するも偽撰。なお出三蔵記集卷八所収の思益経序は、陸澄の法論目録には「思益経義疏序」と為しており、これが正しい名称である。右の十一部の中には僧叡の撰として甚だ疑がわしいものも存する。後日改めて検討する。

(20) 出三蔵記集卷八(大正55・五八c~五九a)。

(21) 出三蔵記集卷八(大正55・五八c~五九a)。

(22) 僧肇は維摩詰経注序(大正55・五八b)に「余、闍短を以て時に聴次に預り、参玄に乏しきことを思うと雖も、然も飽ぼ文意を得たり。輒ち所聞に順て之が注解を為し、成言を略記して述して作すこと無し」と述べている。僧叡もまた毘摩羅詰提経義疏序(大正55・五九a)に「講次に於て疏して以て記と為す」と云う。

(23) 出三蔵記集卷十二(大正55・八三b)所収。

(24) 出三蔵記集卷八(大正55・五七c)所収。

(25) 大乘大義章については木村英一編『慧遠研究』および横超慧日『大乘大義章における法身説』・『大乘大義章研究序説』(『中国仏教の研究』第二所収)等参照。

(26) 大乘大義章卷上(大正45・一二三b c)。または『慧遠研究』遺文篇七頁。

(27) 松山善昭「支那における南北仏教交流の一視点——羅什

と慧遠——」(『日本仏教学会年報』第二十一号) 参照。松山氏も「殊更に支謙訳によらねばならぬ内容のものではない。又、羅什に質問するのに羅什訳を依用しないのもおかしい」と説いている。なお、慧遠の鳩摩羅什に対する心情は、梁高僧伝卷六(大正50、三五九b)又は『慧遠研究』遺文篇(八一頁)所収の「遣書通好鳩摩羅什」などによって知ることが出来る。

(28) 慧遠・大智度論抄序。出三蔵記集卷十(大正55・七五b~七六a)所収。

(29) 慧遠の法華経序は現存しないが、出三蔵記集卷十一の陸澄撰法論目録に「妙法蓮華経序 釋慧遠」(大正55・八三c)と記載しており、曾て法論第六帙教門集に収められていた。また大唐内典録卷三(大正55・二四八a)等参照。

(30) 橋本芳契『維摩経の思想的研究』(十七頁)には智度論に維摩経を引用すること九回と為すも仔細に見ると次の十一回である。智度論の卷数と所引の維摩経の品目を示せば次の如くである。智度論卷九(弟子品)、同卷十五(入不二法門品)、同卷十七(弟子品)、同卷二十八(弟子品)、同卷三十(仏国品)、同卷三十(不思議品)、同卷八十五(仏国品)、同卷八十八(菩薩行品)、同卷九十二(仏国品)、同卷九十五(入不二法門品)、同卷九十八(仏道品)。

(31) 大智論記(出三蔵記集卷十(大正55・七五b))、小品経序(出三蔵記集卷八(大正55・五二c~五三b))等参照。

(32) 吉藏・百論序疏(大正42・二二二a)等参照。この件については別稿で考察する予定である。

(33) 例えば大唐内典録卷三には「二秦録称什所定者新小品、

即知有旧明矣。諸此例有二十余部。並標新字在於題首。後人年遠多省新字、今並悉無」(大正55・二五三c)と記している。

(34) 一例として橋本芳契『維摩經の思想的研究』第七章「註維摩經の思想構成」を参照。ただし、これは橋本博士の決定説ではなく、「註維摩經の羅什説について」(『印度学仏教学研究』第二十一卷第二号)や『註維摩詰經問疾品講讃』では、別本を「羅什以前の古維摩經」と為す。

(35) 三桐慈海「羅什の維摩疏は道融の筆録か」(『印度学仏教学研究』第十八卷第二号)。

(36) 丘山新「『註維摩經』所引の「別本」について」(『印度学仏教学研究』第二十六卷第一号)および注(34)等参照。

(37) 鎌田茂雄『中国仏教史』第二卷に維摩經について論じ、「羅什訳は支謙訳を生かしながら美しい文体で訳されたために、中国の文学にも大きな影響を与えた。云云」(二七六頁)と述べている。また『仏書解説大辞典』は卷十一(一九九頁)の維摩詰所説經の解説に「訳文においても羅什訳は文理の許す限り多く支謙訳に則り、玄奘訳亦屢々羅什の旧訳文を参酌してその全文を踏襲している。云云」と解説している。

(38) 出三蔵記集卷二(大正55・六c)に支謙訳出の經典三十六部四十八巻を列する中で「維摩詰經二巻闕」と明記している。

(39) 注維摩詰經卷一(大正38・三二八c)。

(40) 注維摩詰經卷六(大正38・三八二a b)。

(41) 注維摩詰經卷一(大正38・三二九b)。

(42) 支謙訳・維摩詰經卷上(大正14・五一九a)。

(43) 注維摩詰經卷一(大正38・三二八b)。

(44) 鳩摩羅什訳・維摩詰經卷上(大正14・五三七a)。

(45) 支謙訳・維摩詰經卷上(大正14・五一九a)。

(46) 注維摩詰經卷一(大正38・三二九a)。

(47) 鳩摩羅什訳・維摩詰經卷上(大正14・五三七a)。

(48) 支謙訳・維摩詰經卷上(大正14・五一九a)。

(49) 注維摩詰經卷一(大正38・三二九b)。

(50) 鳩摩羅什訳・維摩詰經卷上(大正14・五三七a)。

(51) 支謙訳・維摩詰經卷上(大正14・五二〇a)。

(52) 注維摩詰經卷一(大正38・三三四b)。

(53) 鳩摩羅什訳・維摩詰經卷上(大正14・五三八a)。

(54) 支謙訳・維摩詰經卷上(大正14・五二五a)。

(55) 注維摩詰經卷四(大正38・三六九a)。

(56) 鳩摩羅什訳・維摩詰經卷上(大正14・五四三c)。

(57) 支謙訳・維摩詰經卷下(大正14・五三二a)。

(58) 注維摩詰經卷八(大正38・四〇〇b)。

(59) 鳩摩羅什訳・維摩詰經卷下(大正14・五五二b)。

(60) 支謙訳・維摩詰經卷下(大正14・五三三c)。

(61) 注維摩詰經卷九(大正38・四〇六b)。

(62) 鳩摩羅什訳・維摩詰經卷下(大正14・五五四a)。

(63) 支謙訳・維摩詰經卷下(大正14・五三四a)。

(64) 注維摩詰經卷九(大正38・四〇八b)。

(65) 鳩摩羅什訳・維摩詰經卷下(大正14・五五四b)。

(66) 百論序・出三蔵記集卷十一(大正55・七七c)。

(67) 支謙訳・維摩詰經卷上(大正14・五二〇a)。

- (68) 注維摩詰經卷一（大正38・三三五c）。
 (69) 鳩摩羅什訳・維摩詰經卷上（大正14・五三八b）。
 (70) 支謙訳・維摩詰經卷上（大正14・五二一c）。
 (71) 注維摩詰經卷二（大正38・三四六c）。
 (72) 鳩摩羅什訳・維摩詰經卷上（大正14・五四〇a）。
 (73) 支謙訳・維摩詰經卷上（大正14・五二二b）。
 (74) 注維摩詰經卷三（大正38・三五一b）。
 (75) 鳩摩羅什訳・維摩詰經卷上（大正14・五四〇bc）。
 (76) 支謙訳・維摩詰經卷上（大正14・五二三c）。
 (77) 注維摩詰經卷四（大正38・三六一c）。
 (78) 鳩摩羅什訳・維摩詰經卷上（大正14・五四二b）。
 (79) 支謙訳・維摩詰經卷上（大正14・五二五c）。
 (80) 注維摩詰經卷五（大正38・三七三c）。
 (81) 鳩摩羅什訳・維摩詰經卷中（大正14・五四四c）。
 (82) 注(66)に同じ。
 (83) 大品經序〔出三藏記集卷八（大正55・五三b）〕。
 (84) 法華經後序〔出三藏記集卷八（大正55・五七c）〕。
 (85) 注(66)に同じ。
 (86) 注維摩詰經卷二（大正38・三四六c）。
 (87) 大智度論卷三十二（大正25・二九七c）。
 (88) 大乘大義章卷中（大正45・一三五c）。

- (89) 注維摩詰經卷二（大正38・三四六c）。ただし、この「肇曰」以下の注釈を「什曰」として鳩摩羅什の釈と為すテキストもある。
 (90) 例えは無羅叉訳・放光般若經卷十二歎深品に「菩薩雖得空無願之道、離般若波羅蜜、不持遍想拘舍羅、便証真際得弟子乘」（大正8・八四b）とあるが、鳩摩羅什訳・摩訶般若波羅蜜經卷十六大如品に「菩薩摩訶薩雖有道若空若無相若無作法、遠離般若波羅蜜、無方便力故、便於實際作証取声聞乘」（大正8・三三六b）と訳されている。
 (91) 鳩摩羅什訳・維摩詰經卷下（大正14・五五五a）。
 (92) 吉藏・維摩經略疏卷五（新文豐出版公司印行本、卷二九、三三三頁）。
 (93) 吉藏・維摩經略疏卷二（新文豐出版公司印行本、卷二九、二五〇頁）。

付記

- (*) 本稿は昭和五十九年度文部省科学研究費一般研究(c)による成果の一部である。
 (†) 菅野博士氏から提供された同氏の編になる『「注維摩」羅什・僧肇・道生対照表』によって多くの示唆を得た。